まち歩きで体感する大阪の魅力
（朝日新聞関西スクエア２１　原稿）

大阪のまち歩きをはじめて十年以上になる。お笑いやタコヤキのイメージが強い大阪だが、意外に知られていない歴史や文化的なエピソードが数多く眠っているはずだと考え、フィールドワークをはじめた。歩いてみてはじめて知るまちの表情がある。そこで暮らす人に出会ってはじめて体験する祭りがある。エリアごとに全く文化が異なることに驚いたが、同時に、歴史をふまえて新たな「場」を創っていく人々の志や活動こそ、まさに大阪らしい資源であると気づかされた。

「まちの遺産が壊される。何とかしなくては･･･」「住民の元気が出ることをしたい！」きっかけは様々だが、建築物や音楽・芸能、生活情報などを媒体に、人々の心をつなぎ地域独自の文化を創出する活動は、地元住民はもちろんビジターに対しても新鮮な刺激を与える。

例えば、平野郷のまちぐるみ博物館、帝塚山や天満の音楽祭、空堀界隈の長屋再生への動き。あるいは、福島や天満、地域寄席などで配られる小さな手づくりのミニコミ誌や冊子。何もなかった白紙の状態から、時間をかけて地域に浸透させ、ファンを増やしている。

そんなまちのイベントを愉しみながら、仕掛け人たちにお会いした。地元の“おっちゃん”“おばちゃん”を自称する方がほとんどだが、みな、少年少女のように瞳をキラキラさせて、あれこれ苦労談を語ってくれる。あたたかいオーラに包まれながらまちの物語を聞くと、急にその地域のあり様が、歴史と現在、ケとハレと、重層的に感じられるから不思議である。一方で、自分が住むまちや実家界隈などと比較して、わが心の故郷さがしをしてしまう。

ところで、今、長崎では「さるく博」の真っ最中である。“さるく”とは、長崎弁でぶらぶら歩くという意味で、「国内初のまち歩き博覧会」と銘打ち、４０以上のコースを設定している。各コースを案内するため養成された市民ガイドが７００名近くおり、彼らがノリにノッていると聞く。各コースの地図も、地元住民たちが中心となって作成された。「まち歩き」を長崎の観光資源として未来へ受け継いでいこうというものだ。

他の地域でも、まち歩きツアーが少しずつ増えてきた。ガイドによる解説、地元の人との交流など、スローペースで回ることで、それまで見過ごしていたモノやコトを発見する魅力が大きく、人気を集めつつある。

金沢市では、「まいどさん」と呼ばれるボランティアガイドが活躍しており、観光客のリクエストに応じてコースを設定して案内してくれる。実際お会いして市内のガイドもしていただいたが、金沢を愛してやまない「まいどさん」は、ツボを得たガイドと楽しい雑談、何よりその生き生きとした存在でもって、もてなしてくれた。「まいどさん」その人に出会えたことが経験価値となり、一番思い出に残った。こんな体験をする人が増えてくると、今後は、大型バスでの名所旧跡めぐりツアーではなく、まちの自然や文化そして人間にふれる“歩く旅”のスタイルが選ばれるのは必然だろう。

そして大阪。このまちには、豊富な資源があり、ユニークな人材が溢れている。あとは、圏内外の人々に、スローな旅を愉しんでもらうシステムだ。まち歩きを誘うメニューをつくり、エリアごとの文化や取り組みを味わってもらう機会を数多く提供する必要がある。大阪市では来る秋のイベントとして、ガイド付まち歩きコースを企画しつつあり、一方で、自由に歩きたい人のために、ｉＰｏｄによる屋外版音声ガイドシステムを導入する検討をはじめている。他にも、行政や民間の文化センターで、都心のまち歩き講座を開設するところが１つまた１つと増えてきた。

これからの大きな課題は、担い手の育成である。ビジターをもてなすのは、行政や企業だけでなく、住民こそ中心となるべきであろう。Ｎ

ＰＯやＮＧＯ、ボランティアやその予備軍といえる人の中から、大阪らしい親切でユニークな案内人が何十人も何百人も誕生し活躍するようになれば、生き生きとした大阪人が増え、またその活動が大阪名物として人気を博するようになるだろう。

心に残る旅を演出するために、同時にまちも人も元気になるために、今、各組織やグループの縦割りの壁を取り払い、手を携えて取り組む時期にきている。